

# スカイプでの異文化間交流の実践

## - ピアティーチングを通じた英語学習への意識変容 -

井坪葉奈子\*1

Email: s14091hi@sfc.keio.ac.jp

\*1: 慶應義塾大学総合政策学部総合政策学科

©Key Words 異文化間交流, ピアティーチング, 英語学習

### 1. はじめに

グローバル化が進む社会の中で、英語の実践的コミュニケーション能力を育てることの必要性が高まってきた。本研究では、東京都の公立中学校とスリランカ民主社会主義共和国（以下スリランカ）のインターナショナルスクール、また、長野県の公立中学校とタンザニア連合共和国（以下タンザニア）の現地校の間で、スカイプのビデオ通話を用いた異文化間交流を行った。お互いの文化について、クイズを通して教え合うことで、中学生同士のピアティーチングの要素を取り入れ、それによって異文化や自国文化への理解を深めると同時に、英語学習への意欲を高めることを目指した。本論文では、アンケートとインタビューを用いて、スカイプのビデオ通話による異文化間交流によって、生徒の英語学習への意識にどのような変化があったのかを明らかにしようと試みた。

### 2. 研究背景

現行の学習指導要領では、「生きる力」を育むということ 키워ドに、過去の学習指導要領からいくつかの改訂がなされている。その中の一つが外国語教育の充実である。特に、外国語でのコミュニケーション能力の素地を培うためのプログラムが増設されており、グローバル化の進展など急速な社会の変化についていける人材の育成には、実践的な外国語教育が必要であることが示されている。このような社会の流れを踏まえ、実際に相手とコミュニケーションを取る中で、ツールとしての英語について学ぶことには意義があると考えられる。ただ、全ての地域・学校で、対面のコミュニケーションが行える環境が整っているわけではない。そこで、今回はオンラインでの交流を行い、地域によって出来る・出来ないがわからないよう、都市部と地方の2ヶ所で同様の異文化間交流を行った。

### 3. 先行研究から見る本研究の妥当性と新規性

Dulay, Burt & Krashen (1984) は、第二言語の学習には、フィルター、オーガナイザーと呼ばれる二つの無意識な作用と、モニターと呼ばれる意識的な作用の、計三つの心理作用が機能していると述べている。この三つの心理作用のうち、今回はより学習者の感情と連動している、フィルターとモニターの役割について詳しく述べたい。フィルターは情意フィルターとも呼ばれ、新しい言語のインプットを、学習者の動機、ニー

ズ、態度、感情の状態などのフィルターで無意識的に取捨選択、ふるいにかける心理作用の一部であるとされている。

田所 (2001) は、情意フィルターの一つ、感情の状態の一種として、外国語不安について論文の中で先行研究をまとめ、提示していた。それによると、Horwitz, Horwitz & Cope (1986) は、外国語学習においてスピーキングを通じたコミュニケーション能力の習得を阻害する理由は学習者の不安にあり、その不安は特に教室で行われる外国語学習に特有な、「外国語不安」というものであると考えた。田所はここで、外国語不安の種類などと並んで外国語不安と接触度について言及している。これについて田所は、目標言語に接触する時間が増え慣れてくれば、不安が減少するという立場から見た研究があるというように述べている。

モニターは、アウトプットの直前にそのアウトプットの正当性を確認、自己調整を行う心理作用の一つである。モニター使用は特に自信と自意識に左右され、自信があり自意識が低い人間はモニターを過剰使用しないため、文法的正しさが気になって意思伝達が阻害されるということがないと考えられている。それに関連して、倉八順子 (1995) が述べている Clement & Kruidenier のモデルの中では目標言語話者との交流が自信につながるとしている。

田所、倉八の先行研究より、目標言語話者との交流が、学習者の自信につながり、また、不安の減少にもつながると考えた時、異文化間交流を中学生の英語学習への意識変容に関連付けることには妥当性があると考えられる。

また、Michael Marek (2008) は異文化間交流学習と言語学習への大学生の態度変容を繋げて研究を行っており、動機づけにおいて目標言語話者との交流は統計的に有意な数値の上昇をもたらすと結論付けている。ただ、Marek が行ったものも含め、これまでの先行研究は、学習者が大学生などの場合が多く、また、あくまで「目標言語話者」との交流を研究対象としていた。本研究では、中学生同士という同世代の交流に焦点を当てており、交流する日本の中学生・スリランカのインターナショナルスクールのEFL (English as Foreign Language) クラス生・タンザニア現地校の中学生は全員が英語を第二言語として学んでいるため、この研究で取り上げているのは、学習者同士の交流であるという点で、今回の研究には新規性があると考えられる。

#### 4. アンケートの作成

アンケートの作成に際し、今回は中学生の英語学習への意識の中でも、外国語不安と動機づけに着目した。

##### 4.1 外国語不安

外国語不安に関しては、近藤、楊 (2003) が作成した日本人向けの英語授業不安尺度を基に、アンケート対象者が、大学生が提供するワークショップを受けている中学生であることから、「先生」という言葉を「大学生」に、「学生」を「生徒」に、「教室」・「授業」を「ワークショップ」に適宜変更し、また難しい言葉はより簡単に書き直し、アンケート対象となる中学生に寄り添ったものとする努力をした。

変更後の項目は以下の通りである。

1. ワークショップで英語を話すとき緊張する。
2. 英語を早口で話されると不安になる。
3. 長文を何度読んでも意味が取れないとあせる。
4. 英作文で書きたいことがうまく表現できないと不安になる。
5. 自分が指名されそうだとわかると不安になる。
6. 自分の間違いを指摘されると恥ずかしく感じる。
7. 緊張すると知っている英語も忘れてしまう。
8. ワークショップ中、前へ出て発表するとき緊張する。
9. 自分の英語が他の生徒に笑われないか心配だ。
10. 大学生が自分の英語をわからないとあせる。
11. 自分の英語のレベルは他の生徒より低いのだろうか心配になる。
12. 単語や文法がなかなか覚えられないとあせる。
13. 自分の話した英語が相手に通じないとあせる。
14. 英語を聞いていて聞き取れない単語が出てくるとあせる。
15. 長文を読むときなかなか読み終われないとあせる。
16. 時間を制限して英語の文を書かせられると不安になる。
17. 苦手なところを質問されるとあせる。
18. 単純な間違いをすると恥ずかしく感じる。
19. 知っているはずの英語が出てこないとあせる。
20. ワークショップで声を出して英語を読むとき緊張する。
21. 他の生徒が自分の英語を下手だと思わないか心配だ。
22. 質問に答えられないとき大学生にしかられないか心配だ。
23. 他の生徒の上手な発音を聞くとあせる。
24. ワークショップで課題がたくさん出されるとあせる。
25. 英語を話すとき発音やイントネーションがうまくできるか心配だ。
26. テープやビデオの英語がわからないとき不安になる。
27. 英文に目を通したときチンプンカンプンだとあせる。
28. 英作文の際自分が書いた文がうまく通じるか心配になる。
29. 急に質問されたとき緊張する。

30. 自分の答えが他の生徒の答えと違うとあせる。
31. とっさに英語が出てこないとあせる。
32. ジェスチャーや大げさな表現をするのは恥ずかしい。
33. 他の生徒の前で英語を間違えたとき恥ずかしく感じる。
34. 大学生と話すのは緊張する。
35. 自分がわからないことを他の生徒がわかっていると不安になる。
36. ワークショップの内容について行けるか不安になる。
37. ワークショップで英語を間違えないか心配だ。
38. 英語を日本語に訳すとき緊張する。

この38項目に対して、「まったく当てはまらない」(1点)、「ほとんど当てはまらない」(2点)、「あまり当てはまらない」(3点)、「当てはまる」(4点)、「よくあてはまる」(5点)、「非常によく当てはまる」(6点)の六件法で回答を求める。六件法を採択した理由としては、五件法など中間点が明確なものだと、アンケート対象者が考えずに中間点を選ぶ可能性があるため、それを排除するためである。

##### 4.2 動機づけ

Takagi (2003) が作成したアンケートの中の、道具的動機づけ、統合的動機づけ、内発的動機づけ、外発的動機づけに関連するものを日本語に訳して使用する。以下が日本語訳されたアンケートである。

###### 【道具的動機づけ】

1. 英語を勉強しているのは、自分の将来の仕事に英語が必要だからだ
2. 将来いい成績を取ったり、いい仕事に就くために英語を勉強している
3. 旅行するときに便利なので英語を勉強している
4. もっと英語がうまくなれば、将来もっといい仕事に就けると思う
5. 将来外国で勉強したいので英語を学びたいと思う

###### 【統合的動機づけ】

6. 西洋の考えや宗教を理解するために英語を勉強している
7. 海外の文化や歴史、芸術を理解するために英語が必要なので勉強している
8. 科学技術の導入に英語が必要なので勉強している
9. 海外の人と友達になりたいので、英語を勉強している
10. 他の文化を知りたいので英語を勉強している

###### 【内発的動機づけ】

11. 英語の勉強は私の趣味のひとつだ
12. 私は英語を勉強している時満足感を感じる
13. 英語は自分の視野を広げるためには大切だ
14. 英語の勉強は好きではないが、必要なので勉強している
15. 英語を学ぶのは楽しい

## 【外発的動機づけ】

16. 英語は国際的な言葉なのでみんな喋れるべきだと思う
17. 必修科目なので英語を勉強している
18. 英語の能力は教養がある人になるために必要だ
19. 英語を学ぶのは私にとって負担だ
20. 高校受験のために英語を勉強している

以上の20項目を混ぜ、外国語不安の調査と同じように、「まったく当てはまらない」(1点)、「ほとんど当てはまらない」(2点)、「あまり当てはまらない」(3点)、「当てはまる」(4点)、「よくあてはまる」(5点)、「非常によく当てはまる」(6点)の六件法で回答を求める。

## 5. スカイクプを用いた異文化間交流の実践

本研究の実践報告は、計3回のスカイクプを用いた異文化間交流についてまとめたものである。ケース1と2の事前準備として、2015年9月7日から19日までスリランカに、ケース3の事前準備として2016年10月8日から16日までタンザニアにそれぞれ渡航している。

## 5.1 ケース1

## 【参加者】

- ・スリランカのインターナショナルスクールの14歳から15歳のEFLクラス的女子生徒5人(国籍：中国、ロシア、韓国、インド、フランス)
- ・東京都内の公立中学校英語部の13歳から15歳的女子生徒5人(国籍：日本)

## 【実施日時】

2015年9月17日の日本時間16時50分から17時20分まで(スリランカ現地時間：13時20分から13時50分まで)の30分間

## 【ファシリテーター】

- ・スリランカ側：筆者、EFLクラスの担任1名
- ・日本側：大学生3名

## 【交流内容】

自己紹介、クイズ大会(お互いが自分の文化に関するクイズを紙に書いて読み上げ、相手に出題する)



図1 スリランカ側での交流の様子

## 5.2 ケース2

## 【参加者】

- ・スリランカのインターナショナルスクールの14歳から15歳のEFLクラス的女子生徒5人(国籍：中国、

ロシア、韓国、インド、フランス)

- ・東京都内の公立中学校英語部の13歳から14歳的女子生徒3人(国籍：日本)

## 【実施日時】

2015年11月24日の日本時間16時15分から16時45分まで(スリランカ現地時間：12時45分から13時15分まで)の30分間

## 【ファシリテーター】

- ・スリランカ側：EFLクラスの担任1名
- ・日本側：筆者、大学生2名

## 【交流内容】

スリランカ側の生徒が英語のスキットを通して、買い物に行った時に使える英語を日本側の生徒に教える

## 5.3 ケース3

## 【参加者】

- ・タンザニアの現地校 Form I クラス(日本の中学2年)の生徒6人(男子3人、女子3人)
- ・長野県内の公立中学校の中学2年生女子生徒1名

## 【実施日時】

2017年2月17日の日本時間17時25分から17時55分まで(タンザニア現地時間：11時25分から11時55分まで)の30分間

## 【ファシリテーター】

- ・タンザニア側：青年海外協力隊隊員1名
- ・日本側：筆者、大学生2名

## 【交流内容】

自己紹介、クイズ大会(お互いが自分の文化に関するクイズを紙に書いて読み上げ、相手に出題する)

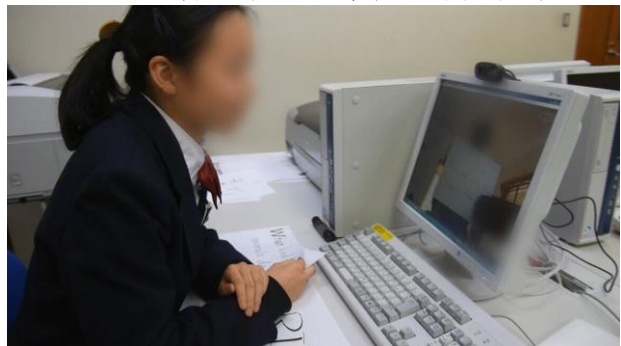


図2 長野県の公立中学校とタンザニアとの交流の様子

## 6. 結果と考察

## 6.1 アンケート

アンケートに関しては、今回は分析を行い、結論を導き出すに至らなかった。その理由としては大きく2点ある。

まず1点目の理由として、アンケートの設問数が合計で58問と多かったため、途中から同じ数字を記入し続けてしまうなど、生徒がアンケートに飽きてしまった様子が見られたことが挙げられる。これによって、有効な回答が得られなかった。

2点目の理由として挙げられるのは、回答数の問題である。ケース1と2において、継続して2回のスカイクプを用いたビデオ通話に参加した生徒は3人しかおらず、また、ケース3においても参加生徒数が1人にとどまったことから、アンケートを分析できるだけの有

効回答数が得られなかった。

## 6.2 インタビュー

生徒にはアンケートを行った後、質的にも今回の取り組みの影響を見るため、「スカイプのビデオ通話を使って、スリランカ/タンザニアの中学生と交流してみてどうでしたか」という質問を投げかけ、感想を集めた。東京都内の公立中学校では、時間の制約もあったため生徒が口頭で述べた感想を筆者がメモ書きしたものを、以下に示す。

- みんな英語をしゃべっていたけど、それぞれ全然違う言葉のように聞こえた
- 1つのクラスに色々な国の人がいて驚いた
- 相手の私服が可愛かった
- 同い年なのに大人っぽい子が多くてびっくりした
- 英語のスキットの中で見えていた服や小物が日本では見たことがなかった

感想として挙がった中では、交流内容として扱ったお互いの文化についての言及はなく、それよりも交流先の中学生の喋り方や服装、雰囲気が気になったようだった。交流相手が出したクイズの内容が、スリランカの独立記念日に関してであったりと、中学生には多少難しいと思われる内容も含まれていたため、自分達により身近な事柄が印象に残ったようだった。ただ、相手に興味を持っていたことは明らかであり、相手への興味は動機づけのきっかけとなりうる。また、「みんな英語をしゃべっていたけど、それぞれ全然違う言葉のように聞こえた」という発言は、国を超えた英語の学習者同士での交流だからこそ得られた、国際語としての英語への理解の第一歩だと考える。

長野県の公立中学校では、スカイプでの交流を行った後日、生徒が記述した感想を筆者に送る形を取った。以下が送られてきた感想である。

- とても楽しくて時間が過ぎるのがはやく感じました。途中、大学生に頼ってしまうことがあったけどリアルタイムで考えながら話すのは楽しかったです。ALT の先生と話すのも楽しいし、勉強になるけど、同年代の子と話すことはあまりなくこれはこれで違った魅力があるなと思いました。ただ、頼ってしまったところが結構あったことが少し心残りなのでもっと自分でできるよう、そして自分の意見を言えるよう、更に勉強はしないとイケないなとも思いました。タンザニア、行きたいです！貴重な体験をありがとうございました。また、ぜひ。

この感想から、今回の交流が英語学習を含む勉強への動機づけとなったことがわかる。この生徒はタンザニアの中学生とのビデオメッセージの交換もスカイプ以前に経験しているため、ビデオ通話を用いたリアルタイムでの交流の魅力というものにも感想内で触れており、ビデオメッセージでは台本を用意して一方的に話していたのが、スカイプを用いた交流では、その場で考えて話す、より実践的な、コミュニケーションツールとしての英語を意識する形になったと考えられる。

## 7. 今後の展望

今回結論を導き出すに至らなかったアンケートに関しては、問題数を減らし、スカイプのビデオ通話を用いた異文化交流から起こるであろう英語学習への意識変容にさらに特化した形にすることが必要だと感じた。具体的には、外国語不安か動機づけ、調査項目をどちらか一方にした上で、例えば外国語不安を調査することに決めた場合、読解や作文に関連した項目を減らし、発話や聴解に関連した項目を残した形にして、よりの確かかつ、中学生でも飽きずに答えられる長さのアンケートを作成したい。

また、今後もこの活動を続けていくにあたり、日本の様々な地域の中学生と、世界各国の中学生を繋ぎ、より多くの中学生を本活動に巻き込んでいくことを意識したい。

## 8. おわりに

本論文では、東京都の公立中学校とスリランカのインターナショナルスクール、また、長野県の公立中学校とタンザニアの現地校の間で、スカイプのビデオ通話を用いた異文化間交流を行った際、お互いの文化について、クイズを通して教え合う、中学生同士のピアティーチングの要素を取り入れることによって、英語学習への意識がどう変容するのかを明らかにしようと試みた。今回の取り組みの中では、スカイプのビデオ通話を用いた異文化交流と、英語学習への意識、特に動機づけと外国語不安の面において、統計的な相関関係は明らかに出来なかった。しかし、生徒の感想から、国際語としての英語の概念に対する理解や、相手の文化の多様性に関する理解が深まり、英語学習への動機づけの一端となったことが伺える。今後も、アンケートの精度や対象人数を増やしたうえで、さらに継続的な形でこの研究を進めていくことで、スカイプでの異文化間交流を通じての中学生の英語学習への意識変容を、より明瞭な形で示すことを目指したい。

## 参考文献

- (1) 倉八順子: “不安と第2言語習得”, 明治大学人文科学研究所紀要, No.37, pp. 77-100 (1995)
- (2) 近藤真治, 楊瑛玲: “大学生を対象とした英語授業不安尺度の作成とその検討”, JALT Journal, Vol25, No.2, pp. 187-196 (2003).
- (3) 田所真生子: “外国語学習における学習者の情意要因に関する考察”, 名古屋大学言語文化学部言語文化研究会 ことばの科学, Vol14, pp. 303-320 (2001).
- (4) Takagi, A.: “The Effects of Language Instruction at an Early Stage on Junior High School, High School, and University Students' Motivation towards Learning English”, Annual Review of English Language Education in Japan, Vol14, pp.81-90 (2003).
- (5) Horwitz, E. K., Horwitz, M. B., & Cope, J.: “Foreign Language Classroom Anxiety”, The Modern Language Journal, Vol70, pp.125-133 (1986).
- (6) Marek, M.W.: “Internet Videoconferencing to Improve EFL Learning”, 2008 Conference on English Teaching and Global Communication (2008).
- (7) Dulay, H., Burt, M. & Krashen, S. (牧野高吉訳): “第2言語の習得”, pp.13-44, 弓書房 (1984).